はしがき

一橋大学創立 150 年史準備室長／学園史資料室長
大月　康弘

『一橋大学創立150年史準備室ニューズレター』第6号をお届けします。

本誌は、2015年に第1号を発刊し、爾来5年にわたり学園史資料室および同室と一体になって活動する創立150年史準備室の活動状況、また一橋大学の歴史（以下「一橋学園史」）に関する寄稿を掲載するメディアとして発展してきました。

近年では、資料室で収集してきた諸資料に関するレポートのほか、一橋学園史に関する学内外の諸賢の論考等を掲載して好評をいただいています。5年後に控えた創立150周年（2025年）に向けてのプラットフォームとして、その機能を発揮しつつあるところと自負しています。

本号にも、多数の力作玉稿を掲載することができました。関係各位のご賛同により、興味深い論考を掲載できたことに感謝します。また執筆者各位には、公私にわたりご多忙のなか執筆くださったことに、心より御礼を申し上げます。

本号には、前々号から始まった「事始め」シリーズの第3弾として、伊東光晴、都築忠七、宮川公男の各先生からご寄稿いただきました。特に伊東先生には、ご多忙のなかご無理を申し上げ、特別寄稿として珠玉の御原稿を頂戴しました。20世紀の理論経済学を18世紀以来の経済学の歴史の大河のなかに見極める碩学に、一橋の学問史、またご自身の学知形成はどう映るのか。玉稿は、昭和20年代の本学における学問事情を明快に描かれ、けだし昂奮を禁じえません。

同様に、都築先生、宮川先生からも雄渾なご自身の学問形成史をお教えいただきました。学生時代、多彩な碩学たちとの知的交流がありました。当時の先生方の個性と学問が、次世代の知性に息吹を吹き込み、またそれぞれに大輪の花を咲かせた様子を拝見し、感銘を深くするばかりです。昭和から平成、そして令和へと続く一橋の学問伝統。読者諸賢にも、本学の学術研究が国内外に放った知的貢献の質の高さに、改めて想いを馳せていただければと思います。

「ゼミナールの肖像」シリーズにも珠玉の原稿2編を頂戴しました。

杉田元宜先生のゼミナールに集われた鶴野史朗、北畠能房ほかの皆さんによる玉稿は、学生時代の学びのあり方を多角的に検証くださっています。社会学部の杉田先生は、当時の日本の物理学界でも注目される存在でした。ご執筆各位との交流のなかで編集子は、当時の一橋祭に出された研究報告冊子を拝見する機会を得ましたが、これが驚くほど高質で（恐縮ながら）たまげました。お訊きすると、冊子は通算で8号おありとのこと。宮川公男先生のゼミナールと共同で営まれた歴代ゼミテン各位の心意気に脱帽しています。大手電算機メーカー各社（国内大手の全社！）

も協賛し、広告を出しています。加えて、日立製作所からは当時の最先端コンピュータを寄贈されたそうです。

進藤孝生氏からも、本学在学中の学びと、それがその後のキャリアの中でどう活かされたかについてお書きいただきました。大学が機能不全に陥っていた昭和44~45年、ラグビー部の活動の傍ら、学業にも主体的に取り組まれました。多彩な交友関係も煌めいていました。国立に進学後は宮澤健一先生のゼミナールに学ばれ、卒業時は総代となられた。文武両道を体現され、今やわが国経済界を代表される氏の歩みは、そのまま70年代以降の日本の歩みと言ってよいでしょう。

本号には、そのほかに田﨑宣義、黒澤節男、鈴木徹郎、野村由美、酒井雅子の各氏から珠玉の論考をいただきました。田﨑先生からは、今後「一橋の今昔」シリーズとして連載いただく予定です。本学にまつわる諸般の謎を解いてくださることになっています。どうぞご期待ください。黒澤氏からは、本学の学術を支える図書館のご苦労譚をお寄せいただきました。改めて申すまでもなく、図書館学の分野でも本学が果たしてきた役割は大きなものがありました。電子情報化が叫ばれ始めた時期に責任者として尽力された氏のご苦労に敬意を表したいと思います。

他方、鈴木氏のご寄稿は、戦後の新制一橋大学誕生（昭和24年）にまつわる秘話を上原専祿学長の尽力を軸に伝えています。国立大学協会長としてもGHQとわたりあった上原学長の苦悩は、戦後の国立大学の編成全体を考えるうえでも重要な論点です。ただ、資料が決定的に乏しく、謎も多い。今後の解明が待たれるところです。鈴木稿は、これまで未解明だった上原学長の足跡に分け入り、この謎に有意な光を当てています。

当室では、東京商科大学時代から戦後の一橋大学にかけての関係諸資料の収集に努めています。上原学長の苦闘についての資料がその代表例ですが、それは何も文字で伝えられる資料に限りません。野村稿が伝える杉山三郊先生は、本学の教授にして稀代の書家で、学園史資料室にも揮毫が収蔵されていますが、作品の散逸が危ぶまれる貴重な存在です。各所に眠る先生の書は、本学に集中的に収蔵するのが得策ではないか、と考えられます。その存在にお気づきの読者諸賢がおられましたら、是非ともご一報くださると幸いです。他方、酒井稿が伝える「一橋祭」資料についても同様です。各世代の皆さんのお手元にある資料を、現役の一橋祭メンバーをも交えて整理されることをお奨めします。さらに分析を深めるべく集中的に設置することを提案します。なお、酒井稿は、2019年11月に図書館の企画で実施された展示を機縁としていることを付記しておきます。

当室は、創立150周年（2025年）に向けて、今後とも汲めども尽きぬ一橋学園史の魅力に触れていく機会をもって参ります。益々のご支援、ご叱咤をお願い致します。